

平成 21 年 5 月 11 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18592346

研究課題名（和文） 育児困難感尺度開発に関する研究

研究課題名（英文） Research on development of a scale of feelings of maternal distress

研究代表者

田淵 紀子（TABUCHI NORIKO）

金沢大学・保健学系・准教授

研究者番号：70163657

研究成果の概要： 本研究は、母親の育児支援に貢献するための基礎研究として、育児困難感尺度の実用化を図ることを目的とした。この尺度は、児の泣きに対する母親の困難な情動に着目したものである。正常新生児の1ヶ月時における泣きに対する母親の育児困難感を測定する尺度として概ね高い信頼性と妥当性を得た。

また、これまで行ってきた困難感に関連する要因の検討調査および文献検討を行い、育児困難感の概念を明らかにした。さらに、NICUを退院したハイリスク児の母親を対象とした調査の分析を加え、正常児をもつ母親とハイリスク児をもつ母親の児の泣きに対する情動反応の差異についても明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	540,000	3,640,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：育児，困難感，母親，ハイリスク児，泣き，情動，尺度

1. 研究開始当初の背景

乳児の泣きは産声に始まり、その後数ヶ月間、乳児の内的情報を伝達する最も顕著な行動である。特に言葉を獲得する以前の時期においては、自らのニーズを伝達する重要な手段の一つとなる。出生時から2～3ヶ月頃ま

では、喉頭・口蓋の発達上、音声分析をしない限りは、泣き声の区別はつきにくい。特に育児経験のない母親の場合は、児の泣き声はいつも同じように聞こえ、泣き声から児の要求を判断することは難しい(田淵他,1998)。育児経験のある母親の場合は、授乳時間や乳児のしぐさなどから、泣きの意味を予測して

いることが多い(田淵, 1999)が、いずれにしても、児の要求を適切に満たせないと、児は泣き続けることになり、母親はなぜ児が泣くのかわからず、何をしても泣きやまない児を前に自分の無力感を感じるとともに、育児不安を助長させる結果となり得る。

川井らの育児不安に関する一連の研究では、児の泣きの解釈がうまくできないことにより、育児不安が生じること、また、育児不安の本態が育児困難感であり、子どもへのネガティブな心的態度や感情が関連していることを指摘している(川井他, 1997)。

最近、問題となっている子どもへの虐待の原因に、児が泣きやまないことによる感情抑制不足があげられている。児の泣き声は母親を引き寄せるものであるが、ときに児の泣きはストレス減ともなり得る。児の泣きに対して困難感や不安を増大させることは、その後、育児ノイローゼや虐待などの危険性につながる可能性がある。

したがって、このような母親の育児困難な状況を予知し、母親の育児困難感や不安の軽減に貢献できる支援プログラムの開発が急務である。まずは育児困難感を示す母親のスクリーニングのための尺度開発をめざし、完成度の高い尺度で実用化していく必要があるとの着想に至った。

母親の育児ストレスを測定する尺度としては、Parenting Stress Index(PSI) (Abidin, 1983)があり、我が国では、奈良間他(1999)が日本版 PSI の信頼性と妥当性を検証している。しかし、この尺度は 78 項目と項目数が非常に多く、使用にあたっては母親の負担が考えられる。よって、できるだけ項目数を厳選し、スクリーニング尺度として簡便に活用できるもので、特に、母親の育児ストレス源となる“児の泣き”に着目した尺度の開発が必要と考えた。

現在、開発中の育児困難感尺度(11 項目)は、正常児をもつ母親を対象に信頼性と妥当性が検討され、内的整合性、構成概念妥当性、基準関連妥当性が確認されている(田淵他, 2006)。したがって、母親の育児困難感に対するスクリーニング尺度としての有用性を得るためには、正常児の母親ばかりではなく、児の泣きに対してより困難感を示すのではないかとと思われる High risk 児の母親を対象としても、同様の結果が得られるか確認し、実用化に向けた基礎資料とする必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、育児中の母親の育児支援に貢献するための基礎研究として、育児に困難感を示す母親を支援するため、現在開発途中の育

児困難感尺度の実用化を図ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 文献学習と概念分析

“育児困難感”という概念は、母親の育児に対する困難な感情を意味すると考えられるが、育児不安や育児ストレスといった類似概念とともに、明確に定義されているわけではない。そのため“育児困難感”に関する最新の文献検討と概念分析を行い、“育児困難感”という概念を構成する現象を明らかにし、“育児困難感”の定義の記述を試みた。

方法は、Rogers のアプローチを参考に、医学中央雑誌 Web 版 < 1983-2005 >、CINAHL < 1982-2005 >、PubMed < 1976-2005 > 等の文献検索システムで「育児困難感」に類似、または近接する用語をシソーラス用語、MeSH をもとに検索して、育児困難感の記述について検討した。

(2) High risk 児の母親を対象とした調査実施 1

2005 年の日本全国の病院・診療所情報 (<http://www.wam.go.jp/iryo>) より、新生児特定集中治療室管理に該当する施設を検索し、ヒットした施設に研究依頼を行い、研究協力の承諾を得た。NICU を退院する児の母親のうち、研究同意が得られた母親に、児の退院後 1 ヶ月時に質問紙調査を実施した。

調査内容は 泣きに対する困難感尺度(田淵, 島田, 2006)、母親の情動尺度(田淵, 2005)、BDI- を用いた。

泣きに対する母親の育児困難感や負担などのストレス及び対処時の困難等など 11 項目からなる困難感尺度は、困難の程度が強いほど高得点となる。情動尺度は“かわいい”、“イライラ”、“泣きたい”など児が泣いた時の母親の情動 10 項目からなり、児を受容する気持ちが強いほど高得点となる。BDI- は、うつ感情を測定する 21 項目からなる尺度であり、抑うつ傾向が強いほど高得点となる。これらの尺度を用いて、得点化し正常新生児をもつ母親(田淵他, 2006)との比較を行った。

(3) High risk 児の母親を対象とした調査実施 2

上記の対象で継続調査に同意が得られた母親を対象とし、児の生後 1 年時に再度質問紙を送付し、NICU 退院後 1 年時の母親の育児困難の実態を調査した。調査内容は退院後 1 ヶ月時と同様、泣きに対する困難感尺度

(Tabuchi & Shimada, 2006) 母親の情動尺度(田淵, 2005) BDI- を用いた。分析は SPSS ver11.5 を用い、対応のある t 検定により、1 ヶ月時との比較を行った。

4. 研究成果

(1) “育児困難感”に関する文献レビューと概念の検討

医学中央雑誌 Web 版 ver.4 を検索してヒットした用語と件数は、「育児」(6126 件)、「心理的ストレス」(4949)、「泣き」(116)、「育児」AND「心理的ストレス」(188)、「育児」AND「心理的ストレス」AND「泣き」(2)であった。同様に PubMed による検索は、「Crying」(128)、「Infant care」(1713)「Crying/Infant care」(43)、「Infant, Newborn/Crying」(121)「Infant, Newborn/crying/ mother-child relations」(28)であった。さらに、Key words 毎に抽出された文献数の年次推移を見ると、最も多かったのは「育児不安」であり、1983 年から漸次増加し、2000 年以降は年間 50 件前後、次に多いのが「育児困難」や「育児困難感」が 1990 年頃よりみられ、「育児負担感」、「育児ストレス」は 1990 年代後半から急増していた。

上記の入手できた 38 件の文献から、「育児困難感」、「育児困難」、「育児ストレス」の記述から検討し、「育児困難感」を次のように定義した。“育児困難感”とは、母親の育児に対する困難な感情や態度として表れる反応や現象をいい、その要因には、子どもの特性(子ども自身の問題、母親が感じる子どもの扱いにくさや子どもの成長・発育で気になること)、母親の育児対処能力、育児に対する考えや想像していた生活と現実とのギャップ、夜間の授乳や泣きなど母親の体調不良の原因となるものの存在、家庭内の調整力低下などに整理された。

また、“育児困難感”が増強すると、母親の抑うつ的な気分や体調不良、育児に対する困惑・自信のなさなど、育児に向かう気持ちや活力が低下し、自身の対処能力を超える負担感とストレスフルな状態を引き起こす心理的状态・反応をもたらすと説明できた。以上、“育児困難感”の明文化について、その要因を挙げ反応や現象を記述説明し、類似概念との構造的関連性について第 21 回日本助産学会学術集会において発表した。

右図は、児の泣きに対する困難感の概念枠組みを示した。

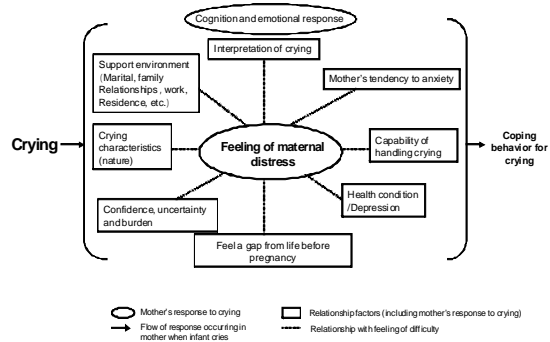


Fig. 1 Conceptual framework of maternal characteristics and feelings of distress resulting from the crying of her infant

(2) High risk 児をもつ母親の NICU 退院 1 ヶ月時の泣きに対する育児困難感

全国 274 NICU 施設中、研究同意が得られた 61 施設の NICU を退院する児の母親に質問紙調査を実施した。606 部配布し、回答が得られたのは 206 名の母親であった。このうち、NICU に 14 日以上入院した児の母親 127 名を分析対象とした。

母親の年齢は、18-44 歳、平均 32.2 ± 4.9 歳で、初産婦 61 名 (48.0%)、経産婦 66 名 (52.0%) であった。児の出生体重は 1590.3 ± 573.4 g (573-3650 g) であり、極低出生体重児は全体の 42.5%、超低出生体重児は 22.0% を占めた。児の在胎週数は、23-39 週、平均 31.7 ± 3.6 週で、入院期間は 17-189 日、平均 61.2 ± 40.3 日、調査記入日は児の退院後平均 19.8 ± 21.2 日であった。

困難感 11 項目の因子分析(主因子法、プロマックス回転)した結果、第 1 因子は 7 項目、第 2 因子は 4 項目からなり、それぞれ「育児に向かう気持ち」、「泣きへの対応と育児の自信」となり、Cronbach's α 係数は、第 1 因子 0.791、第 2 因子 0.673 であった。母親の困難感得点の平均は 25.5 ± 4.0 点 (16-39) で、ほぼ正規分布を示した。

児が泣いた時の母親の情動は 29.7 ± 5.3 点 (15-40) であり、とくに、「抱きしめたい」は、 3.6 ± 0.6 点と最も高かった。

母親の抑うつ得点は、全体で 10.3 ± 7.1 点 (1-50) であった。

児が泣いた時の母親の情動と困難感得点には、有意な負の相関がみられた ($r = -0.617$, $p < 0.001$)。すなわち、児が泣いた時、児をいとおしく感じている母親ほど、困難感が低い傾向にあった。抑うつ感と困難感では、有意な正の相関がみられた ($r = 0.362$, $p < 0.001$)。すなわち、抑うつ感の高い母親ほど、困難感が高かった。

今回、対象となった High Risk 児は、32 週未満の早産児が 38.6%、1500g 未満の極低

出生体重児は 42.5% を占め、全国の NICU 等の施設全体の 22.3% に相当し、年間の総出生早産児の 0.2% / 2004 年に相当した。

これらの結果と正常新生児の母親の育児困難感 (Tabuchi & Shimada, 2006) を比較した結果以下の知見を得た。

出生直後から何らかの理由により、母子分離を余儀なくされる High risk 児の母親は、NICU 入院に伴う児の心配や予後に対する不安などから育児困難感が増大するのではないかと予想されたが、正常新生児の母親と同レベルのものであることが示唆された。また、正常児の母親においては、初産婦の方が経産婦より困難感が有意に高かったが、High risk 児の母親においてはその違いがみられなかった。

以上の結果は、第 26 回日本看護科学学会学術集会、第 22 回日本助産学会学術集会において発表した。また、その成果は Japan Journal of Nursing Science に掲載された。

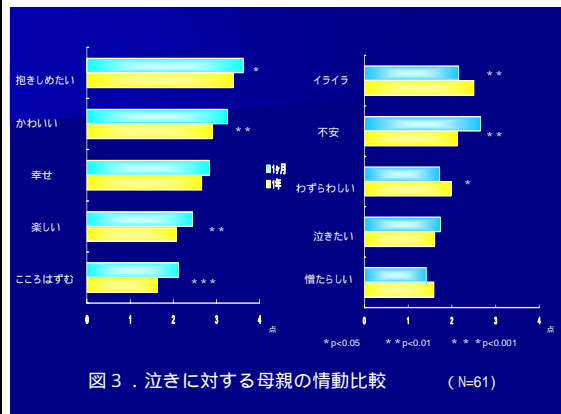
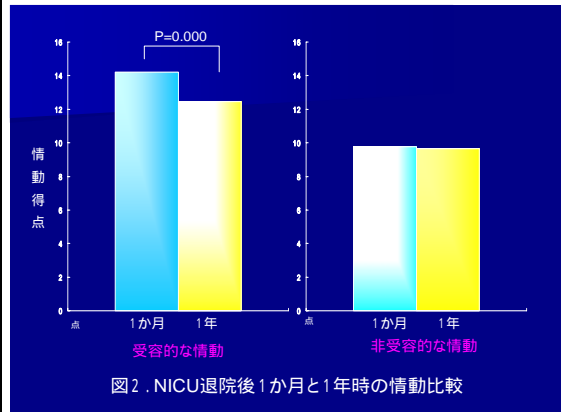
(3) High risk 児をもつ母親の生後 1 年時の泣きに対する育児困難感

継続して調査できた 62 名の母親を分析対象とした (有効回答率 10.2%)。母親の平均年齢は 32.6 ± 4.7 (23-44) 歳、対象児の月齢は中央値 12 ヶ月、修正月齢 10.2 ± 1.2 (7-13) 月 (中央値 10、最頻値 11)、体重は 5.44-12.00 (平均 8.20 ± 1.39) kg であった。

母親の困難感 25.4 ± 3.5 (17-36) で、1 ヶ月と比べて有意な差はなかった。項目ごとにみると、子どもが泣いた時の理由や泣いた時の対処の自信、泣きに対する気がかりが、1 年時の方が 1 ヶ月時に比べ有意に低かったのに対し、子どもの泣きによる家族間の問題と子どもの泣き声からの解放が、1 年時の方が 1 ヶ月時に比べ有意に高かった。子どもの泣き方や育児を負担に思う気持ちなどは 1 年時と 1 ヶ月時で有意な差はなかった。

児が泣いた時の情動は 27.8 ± 4.8 点で、1 ヶ月時の 29.4 ± 5.6 点に比べ有意に低かった ($p < 0.001$)。すなわち、時間の経過とともに、受容的な情動が低下しており、この情動推移は正常新生児をもつ母親と類似していた。

NICU 退院後 1 ヶ月と 1 年時の情動の詳細については図 2、図 3 に示した。



以上の結果は、第 27 回日本看護科学学会学術集会、第 23 回日本助産学会学術集会において発表した。

以上のように、本研究の成果は、今回我々が開発した育児困難感尺度により、正常新生児および High risk 児の母親の 1 ヶ月時のスクリーニングとして活用できると考える。

また、教育面においては、High risk 児をもつ母親の心理面への理解に貢献できると考える。

今後は、縦断的追跡調査による長期的な分析をふまえて、泣きに対する母親の困難感の高さがその後の育児の虐待的な問題にどのように発展していくのか検討していく必要があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

Noriko Tabuchi, Keiko Shimada (1 番目), Maternal characteristics and feelings of distress resulting from the crying of high-risk infants. Japan Journal of Nursing Science, Vol.5, 99-108, 2008, 査読有

Noriko Tabuchi, Keiko Shimada, Yukie Kameda(他2名,1番目),Mother's feeling of distress and related factors resulting from the crying her one-month old infants. Journal of Japan Academy of Midwifery, Vol. 22, 25-36, 2008, 査読有

Noriko Tabuchi, Keiko Shimada(1番目), Development of a scale of mothers childcare difficulty feeling toward their infants crying. 金沢大学つるま保健学会誌, 30巻, 179-192, 2006, 査読有

田淵紀子, 島田啓子(1番目), 生後1ヶ月から1年までの乳児の泣きに対する母親の情動反応に関する縦断的研究, 日本助産学会誌, 20巻, 26-36, 2006, 査読有

[学会発表](計5件)

田淵紀子, 島田啓子(1番目), NICUを退院した児の泣きに対する母親の情動反応の推移, 第23回日本助産学会学術集会, 2009.3.21, 東京

田淵紀子, 島田啓子, 亀田幸枝(他2名, 1番目), High Risk児の泣きに対する母親の情動反応, 第22回日本助産学会学術集会, 2008.3.16, 神戸

田淵紀子, 島田啓子, 亀田幸枝(他2名, 1番目), High Risk児をもつ母親の1歳時の泣きに対する困難感, 第27回日本看護科学学会学術集会, 2007.12.8, 東京

田淵紀子, 島田啓子, 育児困難感に関する文献レビューと概念の検討, 第21回日本助産学会学術集会, 2007.3.11, 別府

田淵紀子, 島田啓子, 亀田幸枝(他2名, 1番目), High Risk児の泣きに対する母親の育児困難感, 第26回日本看護科学学会学術集会, 2006.12.3, 神戸

6. 研究組織

(1)研究代表者

田淵 紀子 (TABUCHI NORIKO)
金沢大学・保健学系・准教授
研究者番号: 70163657

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

島田 啓子 (SHIMADA KEIKO)
金沢大学・保健学系・教授
研究者番号: 60115243

亀田 幸枝 (KAMEDA YUKIE)
金沢大学・保健学系・助教
研究者番号: 40313671